第 2 部

各 部 会 の 歩 み



刀匠山浦真雄、清麿生誕の地

絵画部会

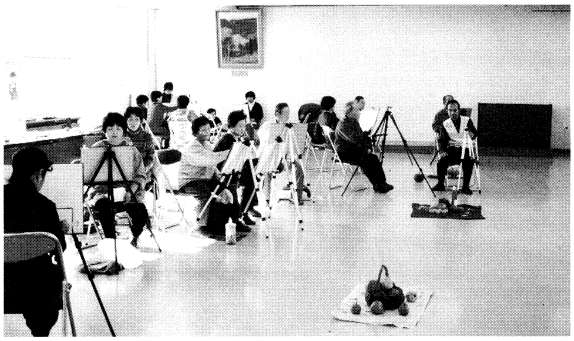
グループ数　3
会　員　数　45名

東部町美術会は、本年で52年を迎えました。

平成12年10月に発足50周年記念事業として、記念誌（カラー版画集）の発刊、記念展の開催、記念式典が盛大に行われました。会として大きな節目の事業に対し、東部町長を始め、それぞれの関係機関の皆様には、絶大なるご支援、ご協力を賜り感謝申しあげます。

東部町美術会は、祢津美術会（昭和24年発足）、滋野美術会（昭和29年発足）が町全体の会となり、町村合併により東部町美術会に継承され、初代会長に寺島長虎氏が就任し当初会員数15人位で発足しました。現在は、荻原芳雄氏会長のもと、会員数30人で水彩画、油彩画を中心に毎月２回の定例会をもち静物、人物、写生会を実施しています。展覧会は年２回の会員展（うち１回は年度当初にテーマを決めて活動）と、湯楽里館ホールで３ヶ月に１回10人ずつ交代で小品展を開催しています。なお現在会員の中には、中央の美術団体である日本水彩画展、その地方展であります水彩県展に出品する者が多くなりました。また長野総合県展、上小美術展に出品する者もあります。

今後の課題は、会員の増員と作品の技術向上を計り、60周年記念事業をいかに企画するかです。



いつ輪会は、昭和58年に飯高徳喜氏指導で東部町主催の絵画教室受講生10人で発足しました。中間５～６年休会しておりましたが、平成12年度から活動を再開しました。

現在横沢義次会長のもと、会員数６人で水彩画を中心とし毎月２回の定例会をもち活動しています。展覧会は毎年１回の会員展と、福祉センターの壁面をお借りして２～３点ずつ交代で展示しています。今後の課題として会員の増員と良い指導者を得たいと思っています。



水彩同友会は、平成11年に町のいきいき生涯学習塾を卒業した同期生が、引き続き水彩画を学習しようと設立されました。

現在、グループ責任者の月野貴久氏のもと、会員数９人で毎月１回の定例会をもち水彩画を学習しています。展覧会は会としては開催しておりませんが、町が主催する総合文化フェスティバルに出品しています。

今後の課題としては毎年１回の会員展を早く企画できるようにすることです。

３部会の活動は別行動でありますが、水彩画を主体としている会であります。この事は東部町の豊かな自然と、絵画の巨匠、丸山晩霞氏の生地としての影響が強いものがあります。今後ともこの地の利を生かした地域の芸術文化の向上をめざしていきたいと思います。また町の施設壁面をもっと開放していただき、多くの会員の作品発表ができるよう部会として研究していきたいと考えます。



水墨画部会

グループ数　1
会　員　数　15名

一、部会の結成と経緯

私がこの水墨画教室に入会したのは、昭和62年（1987）、22名で、その時すでにＯＢの方が７名おり、29名でした。従って教室はその数年前から開かれていたように思います。

当時の教室は初心者が入会する組と、数年も前から体験した人達の会との２つに別れていたようです。



初心者の人達の方の会は１年か２年で辞める人など会の組織も年ごとに変わっておりました。

しかし一度水墨画の魅力に取りつかれた人達は10年、15年と少しでも良い作品へと奮闘努力し今でもやっていて、そのため少しの変動はあるものの殆ど同じメンバーがここ数年来ずっと継続しております。

二、入会の動機

はじめ、私が水墨画というものに魅力を感じたのは、私の家、いや一般の家の床の間に飾られているあの美しい掛け軸はどんな人がどのような方法で描いたのだろうかとの疑問をもっていたからです。それが、和紙の上に表装され見事な美しさとなって掛け軸に姿をかえ展示会にあったということです。

しかも生涯学習の人達によって美しい山水画が描かれていること。

その技法たるや古典的技法や伝統的技法によって表現されている見事さに感じたからです。

その当時私は勤めの関係上、入会する事はできませんでしたが、自由の身になったら必ず入会して、私に出来るかもしれないという思いがあり、そして、少しでも芸術の世界に入れたなら毎日も楽しく過ごせるのではないかという思いでした。

三、水墨画の特徴

本来、絵画といえば日本画とか洋画が主流で、学校教育の面でも水彩のように彩色されたものが中心におこなわれていたのではないかと思います。

水墨画については墨色の濃淡だけで山水（洋画では風景）を表現するというのは、より単純化されたものの中に美をもとめようとする思想から来ているように思うのです。

このことは私には新しい発見であり、また驚きでもありました。

源流は中国にあるとはいうものの、今では「芥子園」（中国の描画書）を乗り越えて、日本独自の水墨画が発達している姿を見るとき、先人の偉大さに感じ入っているこの頃です。

四、その後の経過と主な事業

これまで２つのグループに分かれて、先生の指導を受けていましたが、昨年からは会員の高齢化と先生の来館の都合上、１つのグループ15名となり、月２回の定例会を開き、会員同志作品の展示会、それに対しての先生からの指導などを受け教室が活発に活動しております。

先生には毎回数点の新しい画題を用意され主にそれを中心に技能を高めているのが現状です。

作品の展示は
・秋の公民館で行われる発表会
・上田創造館での上小水墨画展
・２月頃、湯楽里館での展示
など多くの人達に楽しんでもらっています。

五、今後の課題と展望

以上、私たちの活動内容を説明しましたが、これからは如何にして描写技能を向上させてゆくか、そして皆様に素晴らしい絵画だと感じていただけるかの一点を目ざします。

会員皆さんとともにより高いレベルの水墨画をめざし努力して行くつもりでおります。

写真部会

グループ数　2
会　員　数　37名

海野写真クラブは、昭和43年に公民館の写真部として発足しました。のち会員が増加したので海野写真クラブとして独立しました。会の事業としまして年２回の撮影会、海野宿ふれあい祭写真コンテストに協力参加しています。新入学児童の記念撮影、区、公民館、保存会の旅行の集合写真等撮り続けてきました。

毎月１回第３日曜日に例会を開き、会員が３点の作品を持ち寄り展示し、その中より各自が５点選び５～１点の点数で評価します。作品の点数を会員別に集計し、各月の点数を年度末に合計して点数の多い順に５位までの入賞者に賞品を出します。それとは別に当初に課題を決めておきまして年度末に作品の展示会を開き、審査して３位までの入賞者に賞品を出し１年間の努力をたたえます。ちなみに本年の課題は「海野宿」(行事、祭りを含む)「子ども」です。

以上の様な事業を行い、写真技術の向上をめざして努力しており、区公民館の文化祭にも作品を展示して来ました。又、町の総合文化フェスティバルにも参加を続けて来ました。

各地の写真コンテストに入選入賞する会員も多数出る様になり、写真撮影の技術研究も盛んです。会では写真技術の研究を目的にしてはおりますが、会員相互の親睦も大きな目的の一つとして運営しております。

もう一つのグループ、写団ＳＦＣについてですが、こちらも昭和43年頃、田中の写真屋の常連客を中心に出来た会と記憶しています。初代会長は文協の副会長もおやりになった故荒井信さんでした。とてもユニークな面白い会長さんでした。

写団ＳＦＣでは毎年１度、かなり前から一泊撮影の旅を続けています。以前はマイカーに分乗して皆んなで目的地を決め計画し民宿泊りが主でしたが、ここ４、５年前からは旅行会社の撮影ツアーに便乗した形に変わってきています。

皆んな結構年齢が増して来ているのでバスを使っての方が旅は楽です。今年は４月に京都へ桜を写しに行って来ました。平安神宮の紅枝垂、仁和寺の八重がとても印象的でした。



今まで佐渡へ３、４回、伊豆方面、横浜横須賀方面、湘南、秋山郷、上高地、飛騨高山、浅草の三社祭り、能登舳倉島などへ行っています。そうそう舳倉島は台風の真只中で、フェリーに乗るや10分もしないうちに船酔の写友、回りも連られて‥‥もうみんな大変でした。

会の歴史は長く、30年近くになるが、人の出入りはあっても人数的にはさほど変化無いものです。そして毎月の例会を楽しみに集まり、お互いの作品を見せ合い、撮影の打ち合わせをしたりお茶をごちそうになったりしています。秋の町の総合フェスティバルとは別に、クラブ独自の作品展「小さな小さな写真展」も今年は５回めになります。多勢の皆様に見て頂きそれこそ良い批評を頂き、それを次回の糧として精進している会員らの今日この頃です。

将来は出来たらクラブ会員一人２点か３点ぐらい集めて作品集を作れたらいいと思います。

写真の好きな人、是非入会して一緒に写真を楽しみませんか？　只今写真部会は２グループしかありません。他の部会のようにいくつもあると良い意味でお互いライバル意識も湧きいい刺激になるのですが‥‥。

書道部会

グループ数　28
（内5グループは部会活動不参加）
会　員　数　223名

一、部会の結成と経緯

書道部会の前身としては昭和41年、町内有志によって東部町書道クラブが発足したということです。最初の２年間は常田の佐藤隆伝先生の指導を仰ぎ、以後は田中の大井臣司先生が55年まで引き続き指導して下さったそうです。

その後町の教養講座の中に組み込まれることになりますが、他にも昭和53年には秀月会が、54年には海善寺書道クラブが、55年には滋野の峰墨会がそれぞれ誕生しています。そして昭和58年、10周年を迎えた文化協会が発行した名簿によりますと、上記グループの他に大井書道教室、武舎武夫教室、中屋敷清水教室が加わり、さらに５名の個人加盟もあって、グループは６、会員も117名に達しています。

東部町書道クラブは発足してから20年ほどの間に、300名もの会員が集まり段級の取得はもちろん、師範免許を得て地域に書道教室を開いた人が何人もあったそうです。

二、その後の経過と主な事業等

年号が平成に改まる頃には10グループほどになっていましたが、部会としての特別な活動はなく、総合文化祭における作品展示が唯一の年間行事でした。グループ活動も手習いに集中していたせいか特筆されるようなこともなく、峰墨会の研修旅行だけが記録に残されています。

しかしそれからの10年間、書道部会はめざましい発展を遂げます。中央公民館で行っている書道講座から次々に新しいグループが生まれ、平成10年には22のグループを数え、会員も200名を越えて現在に至っています。

部会としての活動も活発になりました。平成３年には文化会館が完成しましたが、平成４年の３月には開館一周年記念事業として、書道部会が中心になり著名な文人・墨客の墨蹟展を開催しました。（詳細は長岡惇司氏の記事参照）

また町の自主文化事業として平成６年９月には「上條信山書展」が、11年５月には「成沢臨舟書作展」が開かれ、書道部会も大いに協力しました。両者とも作品図録を刊行しています。

平成７年には岡川桂城作品展が井出けい子氏を中心にした実行委員会によって、開催されました。「ほほえましい俳画、独特の味わい深い文字、遊び心で作られた楽しい小物等」観て欲しかったそうですが、好評を得ました。

なお平成５年からは公民館主催の「新春書き初め大会」が開かれるようになり、平成６年頃からは研修旅行が、さらに平成７年には書道部会の会員展も始まりました。

三、主な年間事業

１、新春書き初め大会への協力――毎年正月の５日頃行い、小・中学生を中心に50名ほど参加します。食改の人たちにより手作りのおぞう煮も頂きます。

２、部会研修旅行――書関係の展覧会や美術館、遺蹟などを中心に見学します。今までに山梨、小布施、新潟、飛騨高山、軽井沢、信州新町などの各方面に出かけました。もちろん観光を兼ね、親睦も深めています。

３、町総合文化フェスティバルへの参加――例年百点近い作品が出品されます。

４、書道部会会員展――本年度は第八回ということになりますが、例年３月、年度をしめくくるイベントとして、大小様々な力作が展示されます。

５、グループ展――香東会が７回、恵水書道教室が３回行ってきました。



四、今後の課題と展望

毛筆に親しむ仲間を子どもや若い人たちの中にも増やしていきたい。なお今後さらに質的な向上をめざして、各グループで研鑽したい。

彫刻部会

グループ数　5
会　員　数　40名

一、部会の結成と経緯

53年の春だったと思うが、役場の大日向さん（現収入役）が拙宅に見えられ、48年から教養講座（木彫）の講師をつとめていた、私の師、中村運司氏（故人）が５年ほどやって疲れたとのことで、私に代ってやってほしいとの事を依頼された。私もどこまで続けて出来るかよくわからないまま、３年ぐらいやるつもりでＯＫの返事をした。

最初は、木友会（10名ほど）として発足、時間も昼食持参で、一日コースとしてやりはじめた。

二、その後の経過と主な事業等

Ｓ55年に、現在の中央公民館が新しく建てられ、平成三年から「生き生き生涯塾」となって生徒さんもだんだんと増加、現在５グループ（男子22名、女子18名）40名。各グループが月２回ずつ主に実習室を使わせていただき、和気藹々とやっている。

無心になって彫り刻み、作品が完成した時の満足感、生徒さんはもちろん、私も歓びでいっぱいである。それ以上に、会員同志の親睦、和が広がることが、いちばん大切なことだと思う。

三、主な年間事業　特徴的な活動

数年前に、公民館のロビーで、展示会、毎年秋の文化フェステイバルへの参加。

それに木彫関係の地（富山県の井波、飛騨高山、他の戸隠の竹細工等）へ遊びも兼ねて研修旅行に行っている。

四、今後の課題と展望

近年、人間は利便性を求めるあまり、化学（科学）による産物に翻弄、又は異常に憧れ、土や木から受ける恩恵を、すっかり忘れてしまっている。すべてを悪いとは云わないが、悲しいことだと思う。

人間（動物）は木（樹）から受ける恵みがなければ、生きることは出来ない。その上、近頃手仕事をする人が益々少なくなり、生活の中に潤いを持たせてくれる木製品など、いよいよ少なくなっている。コンクリートや、プラスチックのものなどに囲まれた暮らしの中からは、人間のやさしさは生まれない。

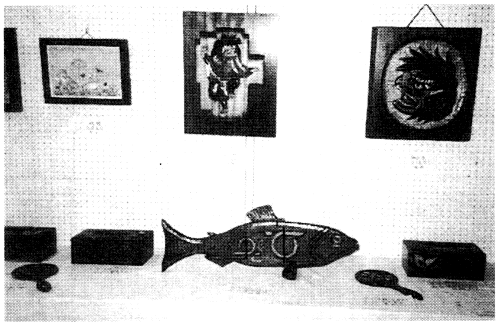
五、その他

農民美術（木彫）が、大正八年、神川小学校で発祥してから80余年、先人達の努力によって我々に受継がれ、全国的にも稀少実用工芸品として愛され歩み続けてきているが、この乾いた現代、もっともっと生活の中に木製品のあるゆとりを持ちたいと思う昨今である。日本ほど、木の種類が沢山ある国は、世界的に見ても無い。

これからも希望を持ってこの道を進み、私も、微力を尽くしていきたいと考えている。



木彫風景



平成５年総合フェスティバル展示作品

民謡部会

グループ数　20
会員数　137名

一、部会の結成とその後の経過

1．昭和49年10月　東上田の有志が大塚氏宅に集まり民謡学習の志を固め、東部民謡愛好会を結成した。会長には大塚志んさんが就任する。発足時の学習会場は公的施設に頼らず、大塚氏宅をお借りし、平成２年２月まで毎週木曜日に８人の会員で練習を進めて来ました。指導者は上田市の寺島恵夫師と定め指導を受ける。

2．昭和49年11月　男性１名参加。

3．昭和50年１月　田中常田地区の女性７名参加。

4．昭和50年４月　田中常田地区に教室が開設され相互交流を図る中で練習を継続する。会としては田中地区の皆さんは分離する。

5．昭和50年５月25日　塩尻市民会館における第10回信州民謡交歓会に初参加。18団体250名参加。

6．昭和51年12月　寺島先生都合により退任される。

7．昭和52年２月　依田昌徳、現千祥会々主先生のご指導を受けることになる。以降現在まで継続している。

8．昭和54年１月18日　田沢地区の女性が２名、当会に加入する。

9．昭和54年３月　新谷先生、降旗先生、依田先生の三教室合同のおさらい会を東部町福祉センターにおいて開催し、参加する。

10．昭和54年４月26日　田沢地区に教室が発足し、第１木曜日と第３木曜日に開設となる為、これまで毎週木曜日に練習していたものが隔週木曜日の教室となる。

11．昭和55年３月23日　上田市民会館において第１回長野千月会連合会の発表会が開催され、それに参加する。

12．昭和55年７月　初伝の伝試験が開催され受験は東京。７名参加し全員合格となり、初伝免状交付は昭和56年11月23日。同年東部町文化協会主催の発表会が開催され、全員出演する。

13．昭和56年11月29日　千祥会第１回発表会が東部町中央公民館において開催され、全員出演。昭和56年初代会長に大塚志んさんが就任する。但し57年11月まで、以降は相談役に就任する。

14．昭和57年11月28日　千祥会第２回発表会開催、全員出演する。

15．昭和58年11月27日　東上田研修センターにおいて四教室合同のおさらい会を開催し、参加。

16．昭和59年２月12日　東部町中央公民館において第３回千祥会発表会開催され、出演する。

17．昭和60年４月７日　東部町中央公民館において第４回千祥会発表会開催、全員出演する。

18．昭和61年３月23日　東部町中央公民館において第５回千祥会発表会開催、出演する。

19．昭和62年８月23日　丸子町音楽村会場において第６回千祥会主催の発表会開催、出演する。

20．昭和63年11月23日　丸子町民センターにおいて第７回千祥会主催の発表会開催、出演する。以降千祥会定例発表会が毎年２月に開催されている。

21．平成元年11月26日　芸能発表会が上山田観光ホテルにおいて開催され、出演する。

二、千祥会25周年記念発表会

平成12年11月12日午前９時より、サンテラスホールにて千祥会25周年記念発表会が開催されました。タイトルは「日本の四季　民謡に遊ぶ」です。

私達千祥会は、地域の皆様の暖かいご支援の基に、25回の四季を通して、お互いの親睦と友和を深めて参りました。明日からは心も新たに、30回に向かって皆んなで頑張って進みたいと思います。町の皆さん、郷土に伝わる民謡を一緒に歌ってみませんか。



舞踊部会

グループ数　30
会員数　127名

一、部会の結成と経緯

公民館活動や婦人会のふれあいの場として踊りを楽しみ、芸能発表会、農協祭、部落の敬老会等で個々に活動してきた踊り好きの仲間が、文化協会の発足で流派を超えて一堂に集まり、民謡を踊るということで部会名を民踊部会と命名し発足(後に舞踊部会に改名)しました。

二、その後の経過と主な事業等

従来からのグループ毎の公民館活動に加えて、1980年度（昭和55年度）に民踊部会としての第１回目の発表会を開催しました。

第11回までは、中央公民館の講堂をお借りして発表会を開催してまいりましたが、平成３年に東部町に立派な文化会館ができたので以降その大ホールをお借りして開催しております。１回目は舞台明かりだけで踊りましたが、後に会館職員並びにサンテラスホールオペレーターの協力によりバックの照明、タワー照明、フットライト等プロ並の演出効果の舞台で踊らせてもらっています。

三、主な年間事業、特徴的な活動

年間事業の大イベントはやはり１年間の練習の成果の締め括りでもある舞踊発表会と言えるでしょう。発表会も回を重ね23回にもなり入場者数は600人を超え、盛大に行われるまでになりました。その他には、

・老人福祉大会のアトラクションへの参加、
・雷電まつりのステージ出演(旧民踊流し)、
・老人ホームの慰安、
・各区の敬老会等のアトラクションへの参加、
・各区の盆踊り、

等があげられます。

平成11年には第20回記念として舞踊部会デザイン特製てぬぐい(踊り用)を作成し、会員及び指導者の先生方並びに関係者各位に記念品として贈呈しました。

デザインは、東部町の花「レンゲツツジ」をモチーフにしました。

四、今後の課題と展望

舞踊は楽しみながら体を動かすことから健康的にも良いのですが、年齢には勝てず年々やめていく部員があとをたちません。平成12年には37グループ170名を越える部員数にまで増えましたが、その後減少しつづけています。

でも、子どもたちが入っているグループは年々増員の傾向にあり、今後若い世代に舞踊の良さを知ってもらい舞踊を広めていくことも私たちの役目と感じております。新しい、ましてや若い世代の入部者といかに舞踊を楽しんで行くかが、今後の課題であり展望でもあります。

五、その他

今、この舞踊部会がここまで発展できたのは一生懸命私たち素人に踊りのお稽古を付けて下さった指導者の先生方の熱意と、発表会の舞台を盛り上げて下さったスタッフのおかげと感謝しております。いくら踊りが好きでも教えてくれる先生がいなくては始まらないし、又それを発表できる場が無くては励みになりません。その点では町民の皆さんにも観て楽しんでもらえる舞踊は、恵まれている部会と思っています。

年々、発表会も見ごたえのあるものに成ってきていますがその反面、衣装に凝るグループが出始めて地道に楽しんで活動しているグループが負担を感じるようになってきたり、部会としての統制がとれなくなってきていました。そこで、今まで発表会のきまりが何も無かったので部会みんなのアンケートを元に舞踊発表会の運営に関する申し合わせ事項を平成11年に制定し、その中で町民の生涯学習にふさわしい姿(この発表会は流派の発表会では無いのだから)とは何かを、改めて考え直しました。この中では会員はもとより指導者の先生にも協力いただいて、会員と一緒には踊らない、指導者の部でも会員の「技(わざ)」の勉強にもふさわしい曲目・衣装の選択などをお願いしています。

30年目を迎え、今後も末永く舞踊を愛する町民すべてが立派な舞台で、和気あいあいと踊りつづけることが出来ることを願っております。

詩吟部会

グループ数　2
会　員　数　52名

詩吟部会は聖風流東部吟道会と岳照流日本誠吟会東部支部の２つの流派で構成されていて、岳照流は昭和42年10月、聖風流は45年２月に、それぞれ10数名の同好者を集め発足しています。その後、各流派ともに会員は増加の一途をたどり、10年後頃には当初の10倍以上の会員を有した時もありました。しかし30数年を経過しますと、会員の老齢化と趣味の多様化等により、ここ数年減少傾向にありますが、月に２、３回の練習日には各教室とも真剣に学び、練習に励んでおります。吟詠は腹の底から声を出す腹式発声ですので健康にも良く、ストレスの解消にもなり壮快感にひたる事ができます。また漢詩や日本詩にふれる事により、その時代の歴史や文化・情景に思いをはせて一考するのも、人生を豊かにするものと思います。

それではここで主な年間行事を先ずは聖風流東部吟道会より申し上げます。

（１）　年１回東部町中央公民館において発表会を開催。

近隣の大屋地区・塩川地区の方を招き合吟・独吟・詩舞など発表します。

（２）　聖風流本部大会の開催

ランク別コンクールで、東部吟道会からも選抜で毎年、10名前後出場しております。

（３）　全国吟詠コンクール

県予選、中部予選、全国決戦と開催されますが、東部吟道会からも過去に１名が全国決戦へ進み10位以内の入賞を果たしております。

（４）　全国少壮吟詠家コンクール

これも県予選、中部予選、全国決戦とありますが、本年も１名が７月に中部予選に進みます。この大会は権威ある大会で５年間に２度入賞しますと少壮吟士の称号が与えられプロとして活躍する事が出来ます。東部吟道会からも過去に１名が全国決戦で入賞しております。



詩舞のスナップ（中央公民館）

次に岳照流日本誠吟会の主な年間行事を申し上げます。

（１）　定期発表会の開催

年１回東部町中央公民館において開催し、独吟、合吟、構成吟、華道吟、書道吟、それに扇舞、剣舞の発表会を行っています。

（２）　テイチク　松口月城杯に参加

年１回東京で開催される松口月城杯に参加しています。

（３）　テイチク専属　準専属　認定試験に挑戦

年１回開催される専属、準専属認定試験に参加し、認定者はＣＤ吹込みを行っています。

（４）　藤村記念式典への参加

８月　小諸懐古園で開催される島崎藤村記念式典日には（千曲川旅情の詩）を合吟出演しています。


華道吟詠のスナップ

謡曲部会

グループ数　4
会 員 数　24名

一、部会の結成と経緯

かつて、この東部町は、謡曲（特に観世流）が非常に盛んであったと聞いております。

ずっと以前はともかくも、昭和５年頃より松代（長野市）の故島田鶴師の要請により、はじめは東京より、故橋岡久太郎師の内弟子、浅井定義師が松代まで来て、当時祢津村の小山忠雄、宮沢義唯両先生は、自転車にて松代まで通い、浅井師が朝鮮に移られてからは、直接橋岡久太郎師につき、稽古をうける（島田鶴師編「謡の友」に拠る）かたわら、小山、宮沢両先生は、広くこの地方に謡曲をはじめ仕舞等を伝授されました。またその後、加沢の原田亥三太、荻原賢太郎、常田の馬場源左衛門、小林顕、祢津の坂口松之助等諸先生を迎え、この道に精進されておりましたが、たまたま太平洋戦争のため、一時休会の止むなきにいたりましたが、昭和20年終戦となるや、24年頃より再び後進の育成に活動を始めました。

昭和33年に町村合併が行われ、東部町が誕生、ようやく人心も安定し、町をあげて各種芸能も活発化する折、田中の武田文三郎氏が発起人となり、昭和36年１月に、東部町観世会が、当時の愛好者82名（９グループ）をもって結成されました。

初代会長は、田中の竹内俊之氏、昭和38年荻原賢太郎氏が２代目会長、昭和43年に加沢の関透氏が３代目会長に就任し、昭和49年に文化協会に加入、当時の会員数は12グループ96名でした。（昭和49年総会資料による）

二、その後の経過と主な事業等

その後、長野市の児玉一太郎師に依頼、以来今日までその指導を受けております。

当会の主な事業は、年３回の定例謡会です。当初は、謡初（１月）、総会を兼ねた発表会（２～３月）、納会（５月）で農閑期を利用した活動でしたが、現在は、謡初（総会を兼ねる）、ゆかた会（８月）、納会（12月）と年間をとおしての事業となり、他に親睦謡曲大会、上小地域と長野市の同好グループを招待して開催、上小地域を毎年持ち廻りして行う謡曲大会（３～４月）に毎回参加しています。

三、特徴的な活動

東京の谷村一太郎師（重要無形文化財保持者）他同門の先生方、囃子方等の出演による謡曲大会を、昭和50年、60年、平成３年、13年の４回行いました。特に平成３年５月は、新築間もないサンテラスホールにて開催しました。

四、今後の課題と展望

昨年2001年５月ユネスコ（国連教育科学文化機関）は、能楽を第１回世界無形遺産に指定しました。日本の伝統文化である能楽が国際的に認められたもので、国民にとって栄誉な事であり、誠によろこばしい限りです。

この機会に、謡曲愛好者をひとりでも増やしてゆく活動を重点的にせめていきたいと考えております。

文化会館のこけらおとし



素　謡



舞　囃

合唱部会

グループ数　9
会員数　136名

合唱部会は当初、戦後の青年団活動の一環として活動してきた和山びこ合唱団、祢津コーラス、海野保育園保護者会の母親を中心に誕生した本海野水曜会、町青年団文化部の４団体で発足した。その後、1980年（昭和55年）に東部町混声合唱団、東部女声合唱団（現浅間混声合唱団）が加入、更に同年５月に町内４小学校、中学校の各ＰＴＡに合唱活動への参加を働きかけ、このうち滋野小・田中小・和小３校に母親コーラスが発足し活動が始まった。祢津小ＰＴＡは祢津コーラスを補完するという形でＰＴＡコーラスとはしないことになった。

合唱部会独自の活動としては、町音楽祭とは別に合唱団体だけの発表の場として合唱団相互の交流と技術の向上を目指して合唱祭を開催している。1981年２月に第１回合唱祭を開催して以降、毎年開催している。

第１回合唱祭の反省会で「プロによる本格的な生演奏を聴きたい」との声があがり、合唱部会を核に町内の音楽愛好者にも呼びかけ「東部町音楽団体連絡協議会」を結成し、町並びに社会教育課のご協力を得て、1981年９月にハープ・チェロ・フルートによる演奏会を開催、以後町文化会館がオープンするまで毎年、中央公民館講堂において演奏会を開催してきた。

1984年夏、長野市をメイン会場として開催された「アジアカンタート世界合唱祭ｉｎ長野」に参加する香港児童合唱団を招き、東部中学校体育館において東部中学校合唱専門部、滋野小・和小ＰＴＡ母親コーラス、本海野水曜会との交歓コンサートを開催した。

1991年３月24日、町文化会館のオープンを記念して260名の大合唱団による「混声合唱のためのカンタータ『土の歌』を作曲者佐藤眞氏の指揮により演奏した。前年３月に「文化会館開館祝祭町民合唱実行委員会」を組織し、佐藤眞氏自身の指導のもと約10ヵ月にわたる練習を重ね、当日はサンテラスホールに満席の町民を迎えて演奏を終えることができた。

1991年４月役員改選によりこれまで10年余りの永きにわたり東部町のクラシック界をリードしてこられた中村新吾氏に代り、役員体制を文化協会と同じ三名とし、部会長土屋征志郎・副部会長山丸洋子・会計岩下幸枝となった。

1992年11月、『土の歌』演奏会で深いご縁ができた佐藤眞・智子ご夫妻を迎え、第12回東部町コンサートを開催、第一部はご夫妻のピアノ演奏、第二部は佐藤眞作曲の「混声合唱のためのレクイエム『眠れ幼き魂』」を演奏した。合唱は合唱部会有志、ナレーターはオーディションで選ばれた古田みな子が好演し、指揮・ピアノはもちろん佐藤眞・智子夫妻である。

「1996年に東部町発足40周年を迎えるにあたり記念事業の目玉としてベートーヴェンの交響曲九番(合唱付)の演奏会をやりませんか」と町よりの提案があり、これを受けて1995年８月に第一回準備会を持ち、翌1996年１月15日に発会式を行い、約一年間の練習を経て12月１日演奏会を開催した。チケットは一週間で完売し、当日は300余名の合唱団員がステージに登った。そしてこの日の演奏は地域でも評判になり高い評価を受けた。

2001年には文化会館自主事業と共催してオペラの合唱曲を一流歌手と一緒に歌おうと計画、11月に澤畑恵美(Ｓ)、高野二郎(Ｔ)を迎え60名余りの合唱団員の出演で楽しい演奏会となった。

合唱部会の加盟団体にも変遷があり、加沢コーラスの脱退、ＰＴＡコーラスも滋野小・東中コーラスだけになり、新たに「ティンカーベル」、「アンサンブルウォールナッツ」が入会し、現在、９団体136名である。また1997年役員改選で副部会長山丸氏に代り黒柳隆次氏が就任、2002年の役員改選で部会長黒柳隆次、副部会長庄村茂、事務局春原礼子・荒川郁代諸氏と交代した。合唱部会の益々の発展を祈る。

華道部会

グループ数　10
会　員　数　92名

一、部会の結成と経緯

昭和43年、華道部会を結成する。

会長　初代　寺島　郁代
　　２代　荻原とめよ
　　３代　寺島まさる
　　現在　小林　清枝

年１回の作品展を開催する。

昭和48年文化協会発足と同時に会に加入し、年一度の作品発表会に参加する。

二、その後の経過と主な事業

総合文化フェスティバルの発表については、いろいろな思い出があります。

平成６年までは中央公民館の１階から３階まで展示場所が広がっていて、会場作りや活け込み、水の管理等に苦労しました。平成７年からは文化協会の皆様のご厚意により、講堂１ヶ所に活けることにより、いけ花本来の美しさを取り戻し、皆様にゆっくり見ていただけると同時に私達も非常に楽になりました。

いけ花というものは生き物ですので、当日活け込まなければならず、夜遅くまで全員が活け終わるまで時間がかかりました。また、水の管理など会期中は毎日朝夕行いますので、会場を１ヵ所にしていただき、現在はとても感謝しております。しかし、会員数の割合に会場が限られていますので、会員数の８割ほどの出品をしています。その他、毎年成人式のお花と中央公民館にお正月のお花を依頼されて、役員一同で制作してきました。ことに成人式のお花は年々作品が大きくなって、現在はホールのほかにステージに２作品を活けております。

また、平成12年より湯楽里館から依頼されて、ロビーに10日間作品を展示することになりました。これは各自の意思により大作から小品花までバラエティーに富んでいて、お客様よりお褒めの言葉をいただきました。

三、今後の課題と展望

いけ花は日本古来からの伝統芸術であります。

現在は、欧米文化に目がいきがちですが、私達の心のふるさととも言える文化を絶やすことなく、守っていきたいと思います。

近いうちに諸流派のいけ花展を開催したいものと話し合っているところです。

四、その他

振り返ってみると、いろいろな行事を行ってきました。

平成３年３月　文化会館のオープン時には障子の衝立をバックに鉄の大花器を使い、表には椿と松、裏には桜と雪柳等の大作を活けました。

平成５年３月14日　町づくりシンポジウムが行われました。そのときの池田町からの講師の方への持て成しとして、文化会館のステージに巨峰のつるを使って大作を活けました。つるは桜井と海善寺の巨峰農家の畑より頂いたもので、新しい作品として良かったと思っています。

平成８年５月18・19日には、「風薫る初夏のいけばな展」を諸流合同で文化会館にて行い、初夏の花々を精一杯活けてみました。初めての合同作品展としては成功だったと思われます。

その他にも、音楽会などの会場へ何点か活けたことなど、懐かしく思い出して話し合っております。



茶道部会

グループ数　6
会　員　数　40名

昭和42年ころ公民館活動として茶の湯グループが寺島宗郁先生を師として発足いたしました。お稽古は各々の支館でやっていました。年に１回の町の作品展にはその稽古ぶりを発表させていただきました。当時は会場が不足しておりまして町職員の方に旧役場の片隅に畳を敷いていただいたり、中学校や田中公民館をお借りした年もあり、それなりに準備や片づけに大変さがありました。そして中央公民館落成記念総合展には唐金の切合せ風炉を備えていただき、新築の二階広間に宗郁先生ご指導のもとにお釜が懸かりました。会員全員が次々にお点前をして、町内の皆さんに一ぷくを召し上がっていただいた時には、私達も嬉しさと幸の感いっぱいでした。

茶道は世界でも日本にしかない文化であり、遠い昔から茶の心を学び稽古を積み自分自身の心の糧にしてまいりました。これからもなおいっそうの精進をいたし、おもいやりのある暖かい心でまわりの人に接してゆきたいものと思います。



茶道部会の土台を築いて下さった故寺島宗郁先生(Ｈ２･87才)



今までのグループ
・宗志会・正和会・茶香会・茶香会第二・雅会・菜の花会・泉会第一・泉会第二・卯月会・草華会
活動は・総合文化フェスティバル・発表会

昭和57年から昼間お仕事を持っている人のために、夜の茶道講座をしてはどうかということで、町の募集に対して多くの皆様が申し込み下さいました。多少の人数の差はありましたが、あれから休むことなく現在に至っております。

その間毎年の発表会、11月の総合文化フェスティバル等勉強の成果を町の皆様に見て頂き、一服を楽しんでいただいております。

茶道は足利時代の後期頃に始まり、初祖千利休から数百年に亘り、日本文化の代表の様なものでございますが、一般には少々窮屈なものであるというイメージを持たれておりました。そうした中で明治の初期には立礼式といって畳がなくても椅子で点前も客も楽しめるという型式がありました。町のご理解により立礼式のお棚を揃えて頂き、町の皆様には椅子で気軽に抹茶を召し上がって頂くことができます。茶道部が今も町の生涯学習として続いておりますのは、それもこれも故寺島宗郁先生と周囲の皆様のお陰と深く心に止め一同益々精進して行きたいと話しております。





発表会・文化フェスティバル

手芸部会

グループ数　12
会　員　数　99名

〈編物教室〉

- もくれん会　昭和56年発足　12名
- むつみ会　昭和62年発足　9名
- ひつじ会　平成2年発足　9名
- 弥生会　平成5年発足　5名

生涯学習の講座で一年の講習を終えて、各々でグループを結成し、手芸品の製作を楽しんできました。最初の頃は手編みで種々な物を作ったり。合皮を染めてカバンなどを仕立てた事もありました。文化刺繍をした事もあり、色々な材料でブローチ作りや衣類の更生などをやってきて、昭和62年から手編みだけに専念する様になり、今では製図や模様編など一人歩きができて、この世に二つとない物を編み上げています。それぞれのグループは80歳余りの人から50歳代の人まで、年令の差を感じさせない仲間づくりができています。これからも手の動く限り、秋の文化フェスティバルに出品を目指し、また仲間の輪を大切にして、ボケ防止のためにも大いに挑戦したいと願っております。

〈パン粘土教室〉

- わかば会　4名

パン粘土教室は昭和62年から始まりました。パンフラワーの材料は粘土に色粘土を混ぜ込み(パンを焼く前の生地と思ってください)細工棒で細工してお花や好きな物を作り、乾燥させて油絵の具で色づけして乾かして仕上げます。今では生徒さんのお家は花いっぱいだと思います。これからは、人形なども取り入れて楽しく続けていきたいと思っております。

- 押花クラブ　平成5年発足　16名

押花材料は庭や野に咲いている花を特殊なマットにはさんで自分で押し花を作って持参し、好きな花絵にします。いちご、西瓜、ぶどうなど果物や野菜のなんでもできます。

13年9月には、湯楽里館で作品展をさせて頂きました。これからも頑張りたいです。

〈レザークラフト・からくさ会〉

昭和61年度の中央公民館教養講座でスタートした「レザークラフト教室」が、2年経った63年から卒業生の有志で「からくさ会」を結成し現在まで続いています。今の会員は13名。

牛革や豚皮を使ってバッグ類、鏡、時計、ぞうり、スリッパなど難しい技術にも取り組んでいます。毎年町の総合文化フェスティバルに欠かさず出品し、まあまあの好評と思っています。

平成14年は会発足15周年にあたり、「からくさ会」だけの作品展を9月14日～16日に、ギャラリー「胡桃倶楽部」で開催する予定です。



〈パッチワーク教室〉

- 針子の会　5名
- 糸車の会　6名
- もめんの会　7名
- さわらび会　13名

生き生き生涯学習塾でパッチワークを始めて10年になります。多くの人々と出会いがあり、どんな時代でも手作りは貴重で大切です。忙しい日々の合間にほっと一息つけて、手作りのタイム、自分だけの空間があります。

色々の布を並べて色彩の配合を考え、それから生まれる発想を創り出す喜びは、何ものにも替えがたいものです。こんな喜びの中にパッチワークは続けられています。



ちぎり絵部会

グループ数　2
会員数　11名

一、部会の結成と経緯

ちぎり絵の柳沢はまよ先生がちぎり絵を始めたのは、たまたま紙に染まったハコベの葉の若竹色の美しさにひかれたのがきっかけで、以来独学で勉強を始めました。和紙をちぎるとできる繊維のギザギサした線の美しさ、筆で描いたような精巧さと、油絵とは一味違った独特の美しさが話題を呼んで玄人顔負けの腕が評価され、昭和57年５月、文化協会、公民館が開いている教養講座のちぎり絵の講師として教室を始めました。

二、その後の経過と主な事業

年を増すごとに生徒数も増えて、柳生会20名、柳友会12名、柳心会14名、柳睦会７名のグループで月２回の学習をしておりました。

平成12年４グループをまとめて名称を「柳寿会」とし、手芸部会から独立して、ちぎり絵部会として発足しました。

① 年１回の総合文化フェスティバルに作品出品
② 平成12年６月中央公民館ロビーで柳寿会作品展をしました
③ 平成12年12月湯楽里館に作品展示
④ 平成13年12月湯楽里館に作品展示
⑤ 平成14年６月湯楽里館に作品展示

三、主な年間事業活動

① 年１回の総合文化フェスティバルに作品出品
② 年１回湯楽里館に作品展示
③ ちぎり絵部が今年20周年です。記念の作品展をしたいと計画しています

四、今後の課題

「作品に挑戦」

誰もが、新しい作品に挑戦する時の、不安と緊張感を、先生のアドバイスにより出来上がった時の喜びは格別です。

それぞれの作品をながめながら「まるで油絵の様だね」などと話し合っております。

それと言うのも、野山の草木を採集して作った、先生特製の和紙を使用させていただいているからだと思います。

その和紙にまけないように、奥深いちぎり絵の道を、少しでも良い作品が出来る様に、皆でがんばって行きたいと、話し合っております。



五、その他

平成８年第13号せせらぎの中から

〈文化行政協力感謝状をいただいて〉

ちぎり絵　柳沢はまよ

ほんの些細なきっかけで始めたちぎり絵ですが、山野を歩き草木を採集し、その草木で出せる色の美しさに心を惹かれ、15年の歳月が過ぎた今、絵に対する製作の難しさと奥深さを痛感しております。

これからも受講生の方々とともに研究を重ね、今までより良い作品が出来るよう努力したいと考えております。

せせらぎ第17号から

〈草花染めの風景画に誘われて〉

ちぎり絵部会

ちぎり絵部会は、柳生会、柳友会、柳心会をまとめて名称を「柳寿会」とし、会員20名で、月２回の勉強をしております。

季節の草花で染めた和紙を使って、風景画を中心に創っています。

和紙を染める事も実習して、この草がこんな色に染まると驚く事もありました。

教室では和やかな雰囲気の中で世間話や、時には冗談も言って楽しく学習しています。

今は文化フェスティバルに出品する製作に「力」を入れて皆さん頑張っています。

人形部会

グループ数　2
会員数　16名

一、部会の結成と経緯

(1)　文化協会発足以前の人形教室

昭和40年４月　高橋節先生のご指導のもとに12人で出発しました。月２回、日本人形の基礎作りから始めました。会場は会員の下村幸子様宅をお借りしてみっちり勉強したものです。

昭和46年には、会場を会員の岩下止代様宅に移して続けられました。この頃になると会員の人数も多くなり滋野地区へも教室ができて製作も進み、独創的、個性的な格調高い作品も出来るようになり、町主催の学習展にも出品するようになりました。

(2)　文化協会加入

文化協会が設立された発足当時から加入しました。個人宅で勉強していた人々が、グループを作り、教室を公民館に移して高橋先生のご指導の下に続けるようになりました。

二、その後の経過と主な事業

(1)　年々希望者が増し、多い時には８教室で70人近い人が人形作りにいそしみました。それと同時に発足当時から高橋先生の願いであった創作人形、押絵などへと製作活動が広がり変化をみせてきました。

(2)　生涯学習と人形教室

町の生涯学習として、人形教室が毎年設けられるようになり、人形作りへの人々の関心は一層の高まりを見せましたが、発足当時からの会員の高齢化による退会者（指導的な役割を果たした方々）もあり、近年は会員数も減少の傾向になってきました。

特に、ご指導をいただいている高橋先生にはご無理なお願いもできないようになり、これからのことが心配であります。

三、主な年間事業　特徴的な活動

(1)　年間事業

①　各グループの製作活動。（月２回）

②　総合文化フェスティバルへの参加。

(2)　特徴的な活動

①　ひなまつり会の実施

各グループごとの作品を３月３日に展示し、ひなまつり会をして楽しむ。

四、今後の課題と展望

(1)　会員の高齢化と後継者の育成。

(2)　新しいグループの誕生もあり、今後への明るい展望もある。

五、その他

高橋節先生からのメッセージ

〈人形について〉

(1)　日本人形について

世界の中に和服の姿は日本にしかない尊いものと思われます。着物、帯の織りの技、染めの技、帯の結び方、頭の髪の結い方、カンザシなど外国では見ることのできない芸術品ばかりと思われます。着物は直線で表現する美しさ、優美さ、気高さを表わしています。着物の美しさの姿にあこがれて、人形として表わして見たくて人形を作ることになりました。着物の美しさだけでなく心も入れていかなければなりません。先生の言葉に「人形をつくるならば心の修養をしてほしい、技はその次」と申されました。人形に作者の気持ちが見えてくるのが恐ろしいほどです。いつも清い気持ちで人形を作る事に努力しなくてはいけないと思っております。

(2)　創作人形について

創作人形は着物でも洋服でもよく自分の作りたいものを創る事が大切に思われます。これからは、創作人形が盛んになることと思われます。だんだんと忙しき折、着物姿は見られなくなりました。美しい日本の着物の美を残して行きたいと思います。人形は種々ありますが、どの人形にしても清らかで優しく上品な人形でありたいと願っております。



◀絢爛「人形の館」

菊花部会

グループ数　1
会員数　24名

一、部会の結成と経緯

昭和46年４月30日に設立総会を開催し規約の決定、役員の選出、事業計画の承認などが行われ、23名の会員の参加により東部町菊花会が発足しました。この会の目的は、「会員の菊作りの技術向上と会員相互の親睦を図ると共に、町民の情操と文化の向上に寄与する」とうたわれ、初代の会長には、それまで菊花会設立準備委員会の委員長として尽力されて来られた、小林進さんが就任されました。

二、その後の経過と主な行事

昭和48年の東部町文化協会の発足と共に菊花部会として加盟し、会長も小林進さんから小林豊さん、有賀正衛さん、渡辺忠重さんと受け継がれ、松澤房視現会長に至っています。毎年行われる最大の行事は「菊花展」であり、一年間苦心惨憺して育てた作品を大勢の人たちに愛でていただけることが無上の喜びです。菊花会発足当時は役場庁舎内の町民ホールで開催されましたが、その後図書館下の駐車場にテントを張った特設会場で、町の総合文化フェスティバルの時期に合わせて開催されるようになりました。



優秀な作品には町長杯をはじめ議会議長杯、公民館長杯、教育委員会杯、文化協会長杯などの顕彰を行い、会員の栽培意欲の喚起と出品作品の水準の向上に資するようにしています。

出品作品の内容も多様化し、大輪の競技花（３本仕立て）の他に花壇作り、盆栽作り、懸崖作り、だるま菊、福助作りなどといろいろな作品が参観者の目を楽しませてくれます。

三、主な年間事業、特徴的な活動

(1)　菊花展……本年度は第32回菊花展
(2)　栽培技術向上のための講習会……土作り・挿し芽の講習会を実施
(3)　その他役員会・菊花展表彰式など
(4)　特徴的な活動

①祢津小学校児童に対する菊作りの指導

松澤会長を中心に役員の手伝いもあり、主に５～６年生（年によっては６年生のみ）を対象に土作りから開花するまでの指導を行ってきました。毎年、大人に負けないようなすばらしい花を咲かせ、菊花展にも出品し見る人の誰をも感動させました。菊の咲いたときの喜びやそれまでの労苦などの体験は、生涯の貴重な思い出として残ることでしょう。

②菊だるま教室

平成５年より昨年まで菊作りの初心者を対象に「菊だるま教室」の講座を開講してきました。毎年10～20名ほど受講し、その作品は菊花展にも出品してもらい、文字通り花を添えて頂きました。この「菊だるま教室」は、菊作りの愛好者を増やすのに役立ったものと思われます。

四、今後の課題と展望

菊作りは、とっつきにくい、難しい、管理が大変だというような先入観が先にたって敬遠されがちです。また、菊作りの先達も高齢になると重い菊鉢を扱うのが困難になってきます。できるだけ早く始めて長い年月を楽しんでもらうためにも若い会員を増やすことが肝心かと思われます。菊愛好者の輪を更に広げるために魅力ある部会の運営を工夫して行きたいものです。一度見事な菊を咲かせた人はきっとその虜になってしまうでしょう。

生涯学習の一環として、大勢の皆さんと触れ合いながら菊作りを楽しみたいと思います。

短歌部会

グループ数　5
会員数　52名

一、部会の結成と会員数

東部町の短歌の発祥は、東部町中央公民館の文化活動の中の短歌講座に有志が集い、矢島米人先生の指導により、東部町短歌の先がけとなった。

グループ名	開設年	会員数	現在会員数
東部町短歌会	昭和48年	13人	13人
東詠会	昭和54年	8人	12人
（青葉の会　昭和54年発足し10年間ほど研鑽を重ね平成2年散会）			
かわせみ短歌会	平成元年	15人	13人
草笛	平成5年	7人	6人
歌浦公英	平成9年	16人	8人

二、その後の経過と主な事業、今後の課題

東部町短歌会　講師に小林一義先生と飯島守夫先生をお願いし開講。

月1回の歌会に併せて「斉藤茂吉歌集」の秀歌鑑賞。年1回の吟行会には名所旧跡を尋ねた。合同歌集「扇状地」も発行。

平成6年から上田市在住の宮崎盛登先生を迎え指導していただき今日に至っている。その間に出雲崎の良寛の里を訪ねる吟行の旅を楽しんだ。毎月の歌会には土屋文明の「新短歌入門」に取り組んでいる。

会員の年令差はあるが和気藹々の勉強会を続けながら、作歌に精進していきたい。

東詠会　初期の頃は矢島米人先生のご指導により短歌の基礎を築かれた。

平成4年5月より上田市の宮崎盛登先生に指導いただき現在に至る。

毎月1回の歌会。年1度の吟行旅行。文化祭への出品。平成7年東部町短歌会との合同吟行会「良寛の里を尋ねて」1泊旅行。

平成8年合同歌集「吾亦紅」第1集発行。平成11年第2集発行。今後の課題として平成14年第3集発行予定。

後継者の育成で初心者の入り易い歌会を目ざす。古典に学びつつ時代を詠む事を心がけたい。他グループの歌集との交流を願う。

かわせみ短歌会　講師に藤沢幸江先生をお迎えし勉強中。月1回出詠し合い歌会。年1回の吟行会。

歌集「かわせみ」発行、第1集　平成2年、第2集　平成5年、第3集　平成8年、第4集　平成12年の4回発行。

文集「詠草第百回を迎えて」平成9年発行。湯楽里館へ作品展示は平成9年から現在まで11回展示。今後いよいよ短歌を生き甲斐として、会員相互の親睦をはかっていきたい。

草笛　講師は藤沢幸江先生。月1回歌会。1人1首ずつ自詠歌を出し合い合同批評する。

文法の初歩について指導していただき、各自かつての既習漢字と現在の漢字のちがいを学習する。

「草笛」の合同歌集作成予定。（平成14年度）10年目に当たり今後は、会の運営や各自の作歌もマンネリ化にならないよう努力していきたい。各自が真剣に一首でも多く作りたい。

短歌蒲公英　小河原ときは先生のご指導で発足。この5月で50回の歌会を重ねる。

月1回の歌会の他に、年2回の吟行会。

吟行会には各自一首ずつ持ち寄り、1泊して歌会をする。その翌月は吟行の歌を課題とし、旅を2倍に楽しんでいる。

今後、合同歌集を作成しようと検討中。会員8名の楽しい会。新入会員をお待ちしています。

東部町にある歌人の足あと
田中の法善寺境内に島木赤彦の
歌碑があります。

七月に入りて雪ある遠き山
　山門外に出立見れば



俳句部会

グループ数　5
会　員　数　47名

一、部会の結成と会員数

石　榴	昭和60年	6名
石楠花	昭和55年	11名
噴　烟	昭和44年	20名
木　耀	平成9年	7名
るつぼ	昭和54年	11名

二、その後の経過と主な事業

石　榴

講師の石井塵外先生のご指導の下、途中北斗会（石井先生以下7名）の皆さんの合流その他の変遷を経て、現在10名で月一回の句会を中央公民館で行っている。

句集は第1号を発行したのが平成元年、つづいての第2号が平成7年である。

「こまくさ句会」（黒姫〈創刊昭和22年〉の東部町支部名）の会員として種々の吟行会、鍛錬会、研究会等に参加、研鑽に励んでいる。

俳誌「黒姫」に投句、掲載

吟行会　年2回

石楠花

講師は石井塵外先生、結成以来殆ど変動もなく現在9名で月一回の句会を中央公民館で行っている。

句集は、第1号を発行したのが昭和57年、つづいて第2号は昭和58年、更に第3号は昭和60年、第4号は昭和61年、第5号は平成5年である。特に第5号は特異なものとして大切に保存されている。

「こまくさ句会」（黒姫〈創刊昭和22年〉の東部町支部名）の会員として種々の吟行会、鍛錬会、研究会等に参加、研鑽に励んでいる。

俳誌「黒姫」に投句、掲載

吟行会　年2回

噴　烟

講師は当初は宮坂克己先生にご指導いただき、続いて清水昭吾先生にお願いし、現在は石井塵外先生の下会員8名で、月一回田中コミュニティセンターで句会を行っている。

句集の第1号を発行したのが昭和48年であり、続いての第2号は昭和53年、そして第3号は昭和58年である。

「こまくさ句会」（黒姫〈創刊昭和22年〉の東部町支部名）の会員として種々の吟行会、鍛錬会、研究会等に参加、研鑽に励んでいる。

俳誌「黒姫」に投句、掲載

吟行会　年2回

木　耀

会は7名で発足。平成10年に東部高校開放講座「楽しい俳句作り」で学習、平成11年より新たに木耀会として発足。現在会員数15名、句会は月一回中央公民館で、窪田英治先生ご指導の下「俳句の基礎学習」と俳句会を行っている。

会は「岳」（創刊昭和53年）に属し、会員として種々の吟行会、鍛錬会、研究会等に参加、研鑽している。

俳誌「岳」に投句、掲載

吟行会　年2～3回

るつぼ

昭和50年稲荷山俳文学に入会。昭和54年主宰斎藤臥龍先生がお亡くなりになり、伊藤文緒先生が主宰になられ「るつぼ俳句会」（創刊昭和41年）となる。その後唐木培水氏をへて現在山本美紗氏が代表を務める。会員東部町常田地区5名、上田地区4名で上小支部として結成する。一ヵ月に一回上田地区又は常田公民館にて先生の指導を受ける。稲荷山の句会にも行き吟行会、各種俳句大会に参加、研鑽を重ねている。

俳誌「るつぼ」に投句、掲載

吟行会　年2回

三、主な年間事業（共通）

・総合文化フェスティバルに参加
・短詩型文学祭に参加

四、今後の課題と展望

・会員増を図ることが最も重要な課題
・合同の会を年に1回持ちたい。
・姨捨、鳥井峠の会にあやかりたい。

陶芸部会

グループ数　5
会員数　27名

1．土呂〜美グループ　　会員数　9名

平成13年度に町会議員の三縄様の働きかけにより、陶芸好きの仲間（9人）が集まって発足し、1年間がたちました。

指導して下さる先生もいない中で、初めての素焼、本焼……不安と期待の中で産まれた物は、色、形はともかく、とても愛着のある作品になりました。……役場の方のご指導にはとても感謝致します。……

これからも一歩一歩、手探りの中から土と触れ合っていきたいと思います。



興味のある方はお出かけ下さい。
毎月：第2・第4　木曜日
A10：00〜P15：00

2．自然グループ　　会員数　4名

99年度生涯学習の終了生の4人のグループです。楽しみながら陶芸を続けていきたいと思っている仲間で、月に1〜2度集まっています。毎日の生活を自分の作品に囲まれて心豊かに過ごすことを会の目標にしています。

それぞれ仕事をもつ仲間なので、無理をせず、気楽に、気長に続けて行きたいと思っています。昨年、初めて自分達だけで素焼き、本焼きを失敗しながら経験をしました。なかなか満足できる作品はできませんでしたが、失敗も良い勉強になりました。

今年はもう少し回数を重ね、一つでも満足のできる作品を作りたいと思います。

また自分達だけの作品だけでなく、いろいろな人の作品を見せてもらい、自らの勉強もしていきたいと思います。

作陶日　毎週金曜日

3．炎群グループ　　会員数　14名

中央公民館完成時、昭和55年に活動が始まり、23年目に入りました。この間山崎先生にご指導をいただき、メンバーは少しずつ入れかわりましたが、よりよい作品を目ざして日々努力しています。

北御牧村の登り窯を焚いた時（火のアートフェスティバルにも参加し、窯焚きを手伝う）からサンテラスで作品を展示するようになりました。参加グループの名前を「炎群」としました。参加者10名〜25名と変動しています。今年も11月下旬に展示を行う計画で、第9回目となり、作品の製作に取り組んでいます。評価も年々上がっています。ぜひご覧ください。

月に2回の作陶と年に3〜4回のグループ合同製作（1〜2日）を行い、各人一人一人が他と違ったものを目ざしています。作陶とは別に月に1回「学習会」を行って、土の特質・産地、釉薬の作り方（市販の混合調整済みのものは使用していない）、作陶時の心がまえ（感性）、窯焚きの方法、分担、陶磁器の歴史・産地等々の研究、話し合いをしています。

今では思い出ですが、北御牧村の登り窯を焚いた時には67時間10分、丸太74本、薪819束という記録が残っています。もちろん交替はするのですが大変です。それでもみんな後で悔やみました。もっと焚けばよかった！土や窯の気持ちになれればよかった！と。

今は山崎先生の窯をお借りして窯焚きをしています。窯焚き時間は20〜30時間位でしょうか。

この集団は先生を中心に真にやきものに興味のある、土を大事にし、火を、水を　自然を愛する者の集まりです。作陶、素焼き、釉がけ、焼成、展示を通して、職業もさまざま、年齢も違いますが、各人の考え方や哲学まで知ることができると思います。3人が美術展に入選する等先生のご指導を得てみんなで頑張っています。

炎群グループ

炎群.塊	7名	作陶日	第1第3月曜日
炎群.陶べ〜	3名	作陶日	第2第4月曜日
炎群.創る	4名	作陶日	第1第3火曜日

音楽部会

グループ数　6
会 員 数　56名

一、部会の結成と経緯

1．昭和48年東部町文化協会発足と同時に「その他部会」として発足。
2．昭和58年「ジャズ部会」に名称変更。
3．平成元年「音楽部会」に名称変更。
4．平成３年「大正琴」「和琴」「三味線」等のサークルを「邦楽部会」として分離・独立。
5．平成６年６月26日部会事業として、「第１回ミュージック・ホリデイー」を開催。（14サークル、156名参加）
6．平成７年７月９日「第２回ミュージック・ホリデイー」を開催。（14サークル、183名参加）
7．平成８年７月７日「第３回ミュージック・ホリデイー」を開催（10サークル、108名参加）
8．平成９年４月、カラオケ関係のサークルを「カラオケ部会」として分離・独立。
9．平成11年４月、ソシアルダンス、フォークダンス等のダンス関係のサークルを「ダンス部会」として分離・独立。
10．平成11年４月、フォーク系バンドを「軽音楽部会」として分離・独立。
現在に至っています。

音楽部会は結成時の構成（その他部会）で示す様に、部会を構成しにくい小規模サークルで、且つジャンルの異なる集合体であったが、やがて各サークルの発展に伴い、同一ジャンルのサークルが多数となった場合に、一つの部会として分離・独立という形をとらせて頂きました。

現在は、楽器演奏を主体にしたジャンルの異なる６サークルによって構成されています。

二、その後の経過と主な事業

音楽部会は前項に示す様に、各種サークルの集合体である事から、部会としての事業は出来にくい状況であったが、関係方面のご支援を頂き「ミュージック・ホリデイー」を開催することができました。



三、主な年間事業及び活動

各サークルの独自事業を紹介します。

①ＴＮＳジャズオーケストラ
定期演奏会の開催、各種演奏活動

②ハーモニカ・クラブ
老人ホーム等への慰問演奏、各種演奏活動

③フルートアンサンブル・エオリア
各種演奏活動

④ハーモニー2000
各種演奏活動

⑤スノードロップ
各種演奏活動

⑥フリューゲル
各種演奏活動

四、今後の課題と展望

ジャンルが異なるため、日常、横の関係としては難しいものが有りますが、部会としての合同演奏会を企画してみたいと考えています。

軽音楽部会

グループ数
会員数　　名



1　部会（現在 あうん としての活動）経緯

① 平成５年発足。(当時オープンハウスとして活動）サンテラスホールを有効に利用することをコンセプトに音楽大好きな仲間達が、発表や仲間作りのために自然発生的に集まった。

2　その後の経過と主な事業等

① 平成６年３月　第１回　東部ひだまりコンサート
② 平成８年４月　第２回　東部ひだまりコンサート
③ 平成10年　　ミュージックホリデー
④ 平成11年12月　サンテラスライブ



3　主な年間事業、特徴的な活動

◎ひだまりコンサートにおいては、収益金を全て東部町の社会福祉協議会に寄付。
◎サンテラスライブ、ひだまりコンサートは、町内はじめ、北御牧村、上田市のグループと共同企画運営。
◎特にひだまりコンサートにおいては、企画、運営を全ての地元の有志で行った。



4　今後の課題と展望

発足当時の部会員は、教員など転勤族が多く町外に出てしまう。その後もメンバーの入れ替えを繰り返したため、個別の活動が多くなり現在は会員数もグループ数も不明である。若い世代の入会など世代交代の時期にきているのではないだろうか。発表の場を求めている方々のご入会を改めて募集したいと思います。

ダンス部会

グループ数　4
会　員　数　47名

1、ダンス部会のあゆみ

ダンス部会は現在４グループが活動しており中には、昭和54年から23年間継続しているグループもあります。各グループはそれぞれ特徴のある活動をしているが、男性会員が少ないことが共通の悩みです。

ダンスは新聞やテレビなどで種々紹介されているとおり健康増進、肥満防止、老化防止、痴呆予防に効果があるといわれているためか高齢者が多く入会し、中年の人に負けずにがんばって、楽しくステップを踏んでいます。

（１）東部ソシアルダンスクラブ

昭和54年結成　　会員数15名

結成以来22年間継続しており、会員の中には結成以来の方や15年以上続けている人が４人もいます。会員の入れ代わりもありましたが、ますます充実し、中央公民館講堂で週１回夜７時から９時までレッスンを続け、気持ちよい汗を流しています。新入会の老若男女も臆することなく挑戦し効果を上げています。種目はワルツ、タンゴ、ブルース、スローフォックストロット、キューバンルンバ、チャチャチャ、ジルバ、パソドブレ、マンボ、サンバなどを教えていただいています。

（２）乙女平フォークダンス愛好会

平成元年４月結成　　会員数10名

世界の民謡フォークダンスを各国の色鮮やかな服装で、輪になったり列になったり軽快なサウンドにのって踊るフォークダンスは本当に楽しい。レッスンは毎週木曜日乙女平公民館で行い、着用する服などは会員達が創意工夫をして作っています。

また滋野地区では、生涯学習の一環として活動を続けています。今後は会員の増加を図るためパーティなどを通じ勧誘をしたい。

（３）アイリス東部

平成12年結成　　会員数12名

中高年の会員が多いので、リズムにのって楽しみながら健康保持ができるダンスを、生涯学習の一環として練習しています。

東部町商工会議所大会議室で週１回木曜日を練習日と決めています。高度なステップで四苦八苦するより、簡単で覚えやすいステップを完全に修得し、きれいに踊れるようにしたい。パーティなどで壁の花にならないで、自信をもって気軽に踊れるよう指導しており、好感をもたれています。

今までダンスが苦手だった人も、初心者の方も歓迎いたします。

（４）ＯＳ踏舞

平成５年結成　　会員数10名

会員は男性４名、女性６名と少ないが、当会の特徴は誰でも踊れるようなやさしく覚えやすいステップを、完全に修得できるまで反復指導を行なっています。「歩ける人なら誰でも踊れる」ということをスローガンに、老若男女を問わず音楽にのって楽しく踊れるダンスを、修得してほしいと念願しています。なお当会では年７回程チャリティパーティを開催し、その収益金を町へ寄付しています。

2、以上各クラブの活動について記述しましたが、それぞれ特徴があり、今後も継続したい。ダンスといえば華やかな服装で男女一組が軽快なダンス音楽にのって、軽やかに踊ってみたいと誰もが一度はあこがれたことがあると思います。現在は健康増進、肥満防止、老化防止、痴呆予防のため、中高齢者に人気があります。中途で脱落する方もいますが「石の上にも三年」がんばれば必ず楽しく踊れます。パーティも各クラブで盛大に行われています。

あなたも挑戦してみませんか、楽しいですよ!! お気軽にお出かけください。

棋道部会

町会員数　63名
町外会員数　10名

一、日本棋院東部町支部

昭和47（1972）年８月発足

町内でも囲碁仲間が大勢いる事を知り、当時役場職員だった、細萱照明氏、山浦靖夫氏、下村茂夫先生に依って支部結成に御尽力され、27名の会員を集って発足した。

〈役員の推移〉

年	支部長	幹事長	副幹事長	会　計
昭和47年～	下村茂夫	細萱照明	山浦靖夫	山浦靖夫
53年～	細萱照明	射手伝太	山浦靖夫	土屋武道
59年～	福島芳佐	吉沢　亨	掛山昌生	掛山昌生
62年～	中沢喜雄	吉沢　亨	掛山昌生	掛山昌生
平成2年～	吉沢　亨	東城武利	掛山昌生	白石三郎
８年～	深町　亘	山岸利夫	成沢和彦	白石三郎
10年～	塚田悦郎	山岸利夫	成沢和彦	田中政徳
12年～	関賢一郎	横関雅徳	成沢和彦	田中政徳

二、その後の経過と主な事業等

町当局を初め町内の各方面から、囲碁普及活動を理解されてご支援とご協力を賜り、そして会員の熱意によって、各種の囲碁大会が、催されています。

〈事　業〉

１、町長杯　S49～　28回
２、ちもと杯　S53～　25回
３、文化協会長杯　H２～　13回
４、コトヒラ杯　H３～　11回
５、月例会　毎月第２土曜日　中央公民館
６、大田区、東部町、交流囲碁大会　４回
７、支部長杯　S59～　18回
８、その他、坂口杯７回、関画廊杯３回等開催されました。

三、主な年間事業、特徴的な活動

１月　支部総会兼新春囲碁大会　45～50名
２月　和杯（生涯学習一環として）　32～40名
３月　ちもと杯（ちもと）　35～45名
４月　大田区、東部町交流　54～60名
５月　東部町長杯　38～45名
７月　東部町文化協会長杯　35～40名
９月　コトヒラ杯（コトヒラ工業㈱）　45～50名
11月　支部長杯（温泉一泊）　20～25名

１、大田区と東部町の交流囲碁大会が、平成11年から、大田区とうぶ休養村で始まり、都会と農村との交流目的で、町交流委員会の協力を得て継続しています。
２、スポンサーの協力による大会が、開催されています。（前記の通り）
３、日本棋院、日本棋院長野県本部等へ加入、対外的な活動として、東信地区支部対抗戦、県都囲碁大会、上小囲碁団体戦等、県主催のイベントに参加しています。
４、小中学生を対象とした、囲碁教室を、毎週成沢和彦五段によって開催しています。（中央公民館にて）

四、今後の課題と展望

１、囲碁会員の高齢化が進んで居り若者の育成が急務となっています。東信地区の各支部会員数が減少して居り15～20名位になって来ています。当支部は上田支部に次いで会員数が有りますが、これからは、年少者及び女性の指導に力を入れていかなければと思っています。
２、生涯学習の一環として、囲碁は右脳を刺激し老化防止に役立つと聞いています。囲碁を通して仲間作りに力を入れていきたい。
３、以上で日本棋院東部町支部の活動報告を終りますが、底辺を広くすれば頂上は高くなると申しますが、一人でも多くの人に碁を理解して戴きたい、特に子ども、若者、女性に力を入れて普及し、21世紀は心の時代と云われています。「囲碁文化」こそ人類共生の絆として、地域・性別・年齢を超えて広く深く定着することを願って止みません。



文芸創作部会

グループ数　6
会　員　数　36名

一、部会の結成について

平成２年から８年まで文化協会の会長をつとめられた丸山光夫(本海野)さんによると、昭和62年頃、短詩型文学祭常連の短歌、俳句、川柳の各グループで一つの部会を結成したらという話がもちあがり、文芸創作部会という部会を作ろうということになったそうです。

しかしいざ結成ということになった時、短歌、俳句、川柳はそれぞれ独立して短歌部会、俳句部会、川柳部会を作ることになり、この三つのいずれにも属さないグループが集まって文芸創作部会ができたのだといいます。創立のころは、ちぎり絵のグループや、創作グループ「微風」などがあり、その後中国語学習グループ「秋桜の会」エスペラント語学習会などもありましたが、いずれも解散か、脱会しています。現在は「かぼちゃの会」「HIP ENGLISH」「ウォルナッツ」「シャーロックホームズと親しむ会」「ピーターの会」「英語で外国童話を読む会」の６グループです。以下各グループの代表者の方に話してもらいました。

１、かぼちゃの会

昭和63年頃ＰＴＡ母親文庫の有志ではじめました。子どもに本を読ませるにはどうしたらよいかというのが発想の原点です。そして人形劇や、ジャンボ紙芝居を作って、町内４つの小学校をまわったり図書館の行事に参加したりしました。力士雷電の紙芝居を作った事もあります。

今年は加沢の伝説「鏡石」の紙芝居を作っています。　会員は５人です。

２、HIP　ENGLISH

10年くらい前に公民館主催の英会話教室が出発の糸口になりました。初代会長は鈴木慶子さんです。週１回火曜日に中央公民館に集まって学習しています。午後８時から９時までです。

先生はアメリカアイダホ州出身のアーロン・ユーリーさんです。内容は時事問題についてのフリートーキングです。　会員は４人です。

３、ウォールナッツ

英会話教室です。昭和63年頃の公民館の英会話教室がきっかけではじめました。週１回火曜日の午後１時から２時まで中央公民館で学習しています。先生は真田町在住のオーストラリア出身のトロイさんで、日本人女性と結婚され真田町の消防団員でもあります。内容は先生が作ってくるテキストを使ったり、フリートーキングをしたりしています。　会員は４人です。

４、シャーロックホームズと親しむ会

昨年(平成13年)の夏、前文化協会長の関義豊さんの呼びかけで結成されました。月１回ホームズの作品を担当当番が研究してきて発表します。昨年の秋は軽井沢追分のホームズの像を見学、周辺の散策をしました。今年の７月27日28日にはくるみクラブでシャーロックホームズ展をする計画です。また会報「グリーンパーク通信」を発行しています。　会員12人です。

５、ピーターの会

会は５年前に結成されましたが、文化協会に加入したのは昨年の８月です。英会話クラブで毎週火曜日の午後８時から９時まで中央公民館で学習会を開いています。先生は現在東部中学のＡＥＴのピーター・クーパーさんで、内容はフリートーキングです。会員には保科町長さんはじめ役場関係の方もおられます。　会員は８名です。

６、英語で外国童話を読む会

平成10年に結成した英語で外国の主として文学作品を読む会です。月１回公民館で午後２時から開いています。グリム童話からはじめて、高校の教科書や、スティーブンソンの「宝島」、サロイヤンの「人間喜劇」を読み、今は高一の教科書とローリングの「ハリーポッター」を読んでいます。　会員は４人です。

籐手芸部会

グループ数　3
会　員　数　24名

一、部会の結成と経緯

趣味を通して集まった者同志が、生涯学習教室にて、一年間勉強して籐手芸の温もりのある作品の素朴さに魅せられて、親睦の和を深めて参りました。

発足は昭和60年籐青会・籐春会、平成８年籐八会、青木嘉子先生・山口春香先生御指導のもと、会員の皆様と文化活動の一環として以来会員数の移動はありましたが、現在は３グループにて頑張って今日まで丸17年努力して参りました。お互いをつなぎとめる人の和こそ一番の宝です。なごやかな中で楽しく学び周囲に喜びを与えながら作品作りに挑戦しております。

二、その後の経過と主な事業

◎中央公民館の教室にて月２回、経験をつまれた先輩の方々を中心にお互いに研究をし、青木嘉子先生の御指導を受けながら技術の向上に努力しております。

籐手芸の奥の深さを知り会員は意欲的に勉強し、各自自分の勉強を成し得た時と作品の出来上がった時の喜びは、また格別の嬉しさを感じております。

◎野外実習里山に入りつる採取

山には自然が生んだ宝物がいっぱいです。かずら・アケビ・葛・藤等が木々にからみ付いて誰れからもきらわれるつる、そのつるが又最高の材料となり楽しみながら色々の作品ができあがり素朴な逸品となります。

◎研修旅行

一泊又は日帰り旅行年一度春の季節に計画して誰れもが心待ちにしている研修旅行会です。楽しい一日です。

三、主な年間事業　特徴的な活動

◎総合文化フェスティバル

総合作品展は、一年間の勉強の発表の場であり、作品を各自が展示し、技術と努力を皆様にご高覧頂ける作品展です。

会員にとっては嬉しい場でもあります。

◎展示即売会

展示即売会もまた違った喜びがあります。心をこめて作った作品を即売するのも悲しいものですが、喜んで使ってくださる皆様がおられると思うと、また次の即売会にて別の作品をと考えます。

◎ボランティア交流会

小品物の作品の即売会です。

◎修学旅行生徒体験実習

県外よりの修学旅行生徒の体験篭作り実習では、生徒さん達が上手に篭を作り上げて家への土産品になると喜んでくれております。

四、今後の課題と展望

籐手芸は奥が深く会員は意欲的に研究努力し頑張っております。

新鮮と感じる自然を飾るインテリアとしても取り入れられ、自然素材を生かした部屋づくりにも生かされて参りました。

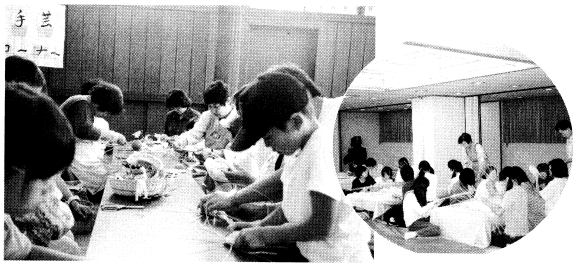
より高度の作品作りに挑戦してすてきな展示会ができ、皆様に喜んでご高覧頂ける様な展示会の開催ができれば嬉しいと望んでやみません。課題と展望を胸に、これからも努力してまいります。

五、その他





展示会



修学旅行生徒体験篭作り実習

邦楽部会

グループ数　11
会　員　数　91名

平成４年４月、音楽部会より分離し、三味線部、五月会、グレープ、しゃくなげ会、どんぐり会、きさらぎ会の６グループ、会員75名で発足しました。邦楽を狭義でいうと三味線音楽、箏曲、尺八など近世の俗楽を指す。そのなかにあってそれぞれの分野で研鑽し、舞台発表を目標に毎年活動を続けて今年で10回を開催してきた。**継続は力**の諺の通り続けることが大切だと感じています。日本人の私達の心に響き渡る心地良い音楽を演奏して楽しんで行きたい。また、地域にねざして人々と楽しく暮らし成長を喜び合い、明日への活力を生み出して行きたい。現在活動グループの熱い意気込みをどうぞ！

五月会　大正琴９人　結成　昭和54年
入会　昭和60年

私達五月会は、発足23周年を迎えました。月２回の練習を、和公民館にて行ってきました。全国大会、長野県民芸術祭参加など、記念に残る思い出が沢山できました。大正琴は健康にもいいし、楽しい。

グレープ　大正琴22人　結成　昭和51年
入会　昭和63年

昭和51年、佐藤雄治先生の声かけで蘇り、今、全世界で数百万人の愛好家が夢を育んでいます。同好者が集い公民館活動の脇役で演奏を楽しんできた。九州から北海道まで方々に行った。海外も行きたい。

しゃくなげ会　箏５人　結成　昭和60年
入会　昭和63年

小平市在住の広木房枝先生にご指導いただき13年。「日本の楽器である琴は、大人になってから始めても十分に上達しますよ」の言葉を励みに、メンバーとの掛け替えのない絆に感謝しつつ楽しく練習している。

どんぐり会　大正琴４人　結成　平成４年
入会　平成４年

私達は、町生涯学習で一年間学び終えたＯＢの集まりです。近在から集い、みな初めての面々でしたが仲良く10年間。楽しくやりましょうをモットーに、続けて学べる間は頑張って行こうと思います。

きさらぎ会　大正琴９人　結成　昭和60年
入会　平成５年

たたら堂巨峰作りのおばちゃん達11人が初めて琴に出会って早、17年たった。国技館の全国大会出演、名古屋の中部日本大会など想い出がたくさん。現在は年１回の文化会館出演を楽しみに頑張っています。

Ｇストリングス　大正琴５人　結成　昭和60年
入会　平成５年

毎日の練習は実に苦しいもの。放り投げようと考えたことも幾度かある。でも根っから音楽が好き、仲間と共に楽しめる音楽を夢見て練習の苦しみに耐えています。存分に音の響きを楽しんで行きたいと思います。

すみれ会　大正琴13人　結成　平成３年
入会　平成５年

私達は先生のご指導で琴を勉強しています。演奏の難しさ、楽しさも存分に体感しています。なかでも、練習後のお茶は、世間話に花が咲き、忙しい日常生活のなか、ホッとする時間で、人世を満喫しています。

こま草会　大正琴11人　結成　平成７年
入会　平成７年

私達は町の生涯学習が出発で大正琴が大好きな仲間です。先生のご指導の下、楽しく学んでいます。、最近、公民館の催し、福祉施設の慰問など周りの人々との交流をして人とのふれあいを大切に活動しています。

尊箏会　箏３人　結成　平成10年
入会　平成10年

邦楽器演奏の楽しさ、醍醐味は、多様な表現力にあると思う。箏が大好きな私達は、苦しみ(？)ながらも、楽しんでいます。義務教育に邦楽が取り入れられ、これを機会に、邦楽の輪が広がれば幸いです。

東部町草笛吹好　草笛１人　結成　平成２年
入会　平成８年

文化協会は、30歳。草笛吹好会12歳。自然世界の贈りもの「草笛」の清らかな音色を後世に伝えようと、全国にただ一つの女性グループです。草笛の勉強と普及に懸命の努力を続けております。

箏藤会　箏８人　結成　平成14年
入会　平成14年

すたれゆく日本の古典音楽を、なるべく多くの人々に聴いて親しんでいただく為、又次の世代に引き継ぐ為、琴古流の尺八と山田流の箏のメンバーにより、会を発足させ、五月より練習を始めました。よろしく！

川柳部会

グループ数　1
会　員　数　15名

一、部会結成と経緯

昭和59年９月、田沢の田中蛙声氏の奔走により「とうぶ川柳吟社」が発会、当時会員は８名であった。

田中蛙声氏を主幹として、月一回月例会を行い、川柳誌「とうぶ川柳」を発刊し、月例会の成果を保存している。

発会当時は、依田川川柳会、長門川柳会等と、三ヶ月毎に合同会を行い、相互の川柳向上に努めた。

二、その後の経過と主な事業

平成元年頃には会員数15名程に増加したが、平成４年４月、田中蛙声氏病気の為引退し、柳沢凡風氏主幹となり、小諸市の佐藤曙光氏を顧問会員にお願いして、川柳向上に専念し、作句に成果が表れた。

平成11年５月柳沢凡風氏病気の為引退し、荒木望岳氏主幹となる。

一方平成10年12月「川柳あけぼの会」が15名の会員で発足した。佐藤曙光氏を中心にし、月１回例会を行い、精進してきたが、会員の漸減の為、平成14年５月「とうぶ川柳吟社」へ合併し現在に至っている。



三、主な年間事業と特徴的な活動

月例会を毎月１回行い、会員相互の親睦と川柳向上に精進している。

川柳誌「とうぶ川柳」は年６回発刊し、現在通刊81号となっている。

全国川柳大会、県川柳大会及び長野、篠ノ井、松代、上田六文銭、小諸あさま等各吟社主催の川柳大会に参加し、とうぶ川柳の名声を高くしている。

親睦川柳会を年２回温泉地に於いて行い、



会員相互の親睦を密にしている。

四、今後の課題と展望

会員の老齢化と川柳の意外のむずかしさのためか、会員は漸減傾向にあり、会員の確保に努めている。

時折川柳講座を催し、川柳の普及を図りたいと願っている。

小・中・高生等若令層への普及活動も必要であると思われる。

償いになるかもしれぬ樹を植える
佐藤　曙光

涙した分だけ汲める思いやり
柳橋スミエ

一期一会驕らぬバラの花ことば
大日向紋子

鯉のぼり不況の波をのみ切れず
小林　武茂

趣味一つ余生へ虹の彩を溶く
上野　秀子

つくし摘む孫の笑顔が目に溶ける
五十嵐　夢

単純な踊りもシナで魅了する
山岸婦佐代

挨拶が明るく返る温い部屋
福島　友子

わだかまり解けた心は日本晴れ
竹内　初江

生きのびて楽しませてる花一輪
丸山　鈍孔

望郷の酒が泣かせるアイヤ節
荻原　翔禹

草むらに可憐に咲いたしたたかさ
宮下　道順

短詩型文字がうれしく位置に付く
藤井　柳昇

正念場耐えて虹見る共白髪
荒木　望岳

表具部会

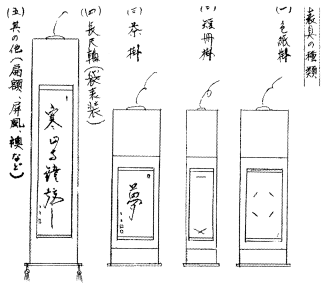
グループ数　1
会員数　8名

一、部会の結成と経緯

小林善信先生談　昭和57年頃加沢公民館にて表具教室の開講を要望され、会場の都合に依り19人と８人の２教室で始めました。その頃町中央公民館での開講を当時の館長であった、小山定雄先生に強く奨められまして、私のやり方でよければという事で引受けました。私のやり方というのは、各個人でベニヤ板その他小道具16種類を購入する事と、材料費も個人負担という条件付きであります。第１回の受講生募集で20人位集まったと記憶しております。それが昭和59年４月の事であります。

以来年々応募が15人～18人位ありました。常時３教室位で進めて参りました。

表具の手法としての基礎をはじめとして、どこの家にも有ると思われる、タンスのこやしとして眠っている書画の類、それ等の物を引出して表具に仕立てる事で、世の中へ出すのが望ましい事だと思いました。あるいは自書自装の素晴らしさを満喫していただく事もよいでしょう。作業が一区切つくとお茶のひとときがあり、みなさんの交流が深まるのもよいことだと思いました。



そういう中で、種類としては、真行草の10通の外に袋仕立、明朝仕立等、実に間口の広い奥行も深いのが表装の姿ですと、そんな話もします。また床の間の意義、書院の意味等もお話をして、ある時は軸を掛ける時の礼儀作法も教えたり、教室の内容では、表具の外唐紙、並びに衝立及び巻物等の話をして、屏風は風炉先屏風と扁額は幾度も作りました。

以来生徒さん達も、自立して掛軸を仕立てておられる姿を見受けるにつけ、本当に良かったと思っております。

平成10年体調を崩して引退をさせていただきました。



二、その後の経過と主な事業

現在の受講生は、平成８年より善信先生に師事、先生が退任された平成10年まで受講し、11、12年度は指導者が不在の中、教えられた事を思い出しながら、自分達だけで、自書自装して参りました。

13年４月より新進気鋭の寺島正樹先生を前会長の関義豊さんに紹介していただき、よき指導者をお迎えすることができ、会員一同張り切って製作に励んでおります。

三、主な年間事業、特徴的な活動

表具教室は現在八装会のグループだけです。毎月１回の教室では、自分で書いた書画やら、中国韓国等旅行で買ってきた書画とか、家に眠っている古いもの等を持ち出して表装しております。今後は年間計画を立て、今まで教えをいただいた、色紙掛、短冊掛、茶掛、長尺軸（袋表装）裂表装等を取り入れ、製作に取組んで参りたいと思っております。

一区切の時のお茶の時間が大変話し合いができ楽しいひとときでもあります。

また教室の他に、花見会、暑気払い、忘年会等の親睦会も実施しております。秋の総合文化フェスティバルの出品作に向けて皆さんで精励しております。

皆さんもよろしかったら一緒にやってみませんか。いつでも歓迎します

せせらぎ部会

グループ数　8
会　員　数　60名

1. 部会の結成と経緯

せせらぎ部会は、平成７年５月に結成されました。この部会は他の部会に含まれない分野のグループの集まりでして、町の「いきいき生涯学習講座」で学ばれた方々が更に学習活動をするために作られたグループがほとんどです。

色々な分野のグループがありますので、個々のグループをご紹介させていただくことで、せせらぎ部会の概要とさせていただきます。

2. 各グループの紹介

（1）「パーソナル無線クラブ信州十成会」のあゆみ　会員12名

昭和56年に会員30名で、局番90010局10チャンネルを使用して、開設当時災害で通行止となり連絡の手段にと始め、現在は会員も12名と減少したが、災害時や隣接する市町村内の情報又県内外の友好組織との交流を図り災害で通行止道路や車の交通情報の交換やその他の情報の連絡網として活動を行っています。

（2）「マーガレット」のあゆみ　会員９名

フラワーアレンジメント教室です。現在は、会員９名で活動３年目になります。

小松先生を中心に、月１回、技術とセンスの向上に頑張っています。会食、お茶会と教室以外でも親睦を深めて楽しんでおります。昨年の発表会は結婚式がテーマでした。今年は？楽しみです！

（3）「モナリザ会」のあゆみ　会員12名

この会は平成９年度の「いきいき生涯学習」で１年間学び、引続きＯＢ会として発足して現在に至っています。途中、赤木先生のイタリアへの研修期間は休みましたが、月１回おいしさを求めて活動しております。毎回調理の後には、赤木先生の豊富な料理の話をもとに会話とイタリヤ料理を楽しんでいます。また、先生ご持参のパンとワインもいただき、お昼のひとときを大いに満喫しております。

（4）「ころりあーじゅ」のあゆみ　会員10名

５年前、上田で先生のトールペイントの作品と出合い、是非東部町で教室をとお願いし、最初は、４人からのトールペイント教室のスタートでした。現在は、10名で、月２回の教室を楽しくおしゃべりをしながら、それぞれの作品を仕上げています。（講師　渡辺みづほ先生）

（5）「キャロットパン」のあゆみ　会員10名

私たちキャロットパンは、平成12年３月より町の手作りパン教室ＯＢ会として結成し、活動を開始しました。

月１回、中央公民館の調理室をお借りして、パン作りの腕を上げるために、宮尾先生のもとメンバー10名で楽しく活動しています。

（6）「七宝会」のあゆみ　会員７名

７年前に東京から提橋景湖先生に来ていただき基礎を教えていただいた事が会の始まりでした。

現在はその時の基礎を基に、丸山さんを中心に皆で互いに教え合いながら、家庭的雰囲気の中続いております。

七宝焼は約800度の温度で焼き、焼いている途中で針棒で表面をかき廻すと、七宝焼特有の紋様が出ます。世界にひとつの作品となります。

（7）「ブーケ」のあゆみ　会員３名

斉藤由美先生のもと、フラワーアレンジメントを学んでいるグループで、せせらぎ部会設立当時から活動をしています。先生は現在パリに花修行に渡仏しております。そのため年に２回程日本に帰国した時に、仏人のフルーリストによる特別レッスンを行っていただき、パリの最新のアレンジを直接見る機会を与えていただいております。お花の話はもちろん、パリでの暮らしについて等々楽しいお話も楽しみのひとつです。普段は生徒達だけで自主的に勉強しております。



マーガレット教室風景

カラオケ部会

グループ数　12
会員数　168名

一、部会の結成と経緯

カラオケ部会の結成は、平成８年で、音楽部会より独立いたしました。それ以前は、５グループのカラオケ教室が、音楽部会にあったと思います。現在、平成14年度のグループ数は、14グループで、168名の会員数となりました。

二、その後の経過と主な事業等

平成６年頃には、音楽部会と合同で「ミュージックホリデー」と題し発表会が行われた。

平成８年に結成され、第１回の発表会が東部町中央公民館で開催されました。第１回の出場者は40名で、第２回は45名、第３回は70名になりました。第４回は103名、第５回は96名、昨年の６回目は122名とだんだん参加者が多くなってまいりました。

「歌は世につれ、世は歌につれ」と申しますが誰でも思い出の歌はあると思いますし、歌は健康にも、大変良い増進剤であります。

三、主な年間事業、特徴的な活動

毎年、８月の第４日曜日に東部町全体の合同発表会が、年間計画の中でも、一番大きな事業であります。うれしいことに、回数を重ねる毎に、年々参加者も多くなり、昨年は、初めて東部町文化会館（サンテラスホール）で122名の出場者で発表会が開催されました。

大きな会場とすばらしいステージをお借りして行われ、多くの参加者が歌手になったような気持で歌うことが出来たと感想を言っておりました。

毎年４月より８月まで、発表会に向けて、各グループの代表で実行委員会が結成されます。

参加者名簿や選曲したり、発表会での内容等の話し合いが行われます。

四、今後の課題と展望

今後は、東部町合同発表会だけでなく、老人施設等へ出向いて福祉面でも活動をしていけるよう慰問を考えています。１人でも多くのお年寄りに喜んでいただけるように委員会で検討してまいります。今こそ「カラオケ」が老若男女を問わず、年々愛好者が増えてふれあいが広がってきております。いろんな施設を巡回したり、人々の心がふれあいを深めて明るい地域づくりができればと考えています。

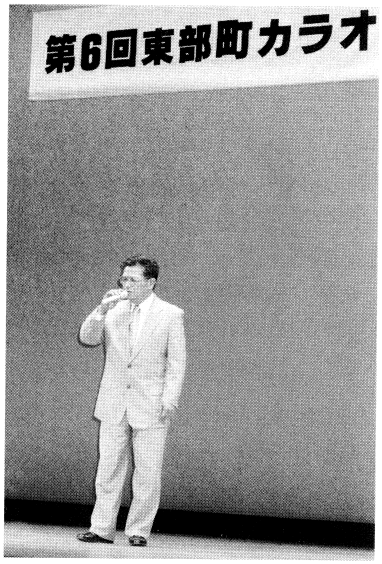
五、その他　雑感・・

「カラオケ」ということばが今、世界の通用語になっています。世界の人々の生活の中へカラオケが浸透している。特に日本の歌「演歌」が、優れた歌であると思う。歌を唄う楽しさ「カラオケ」ファンがもっともっと増えていくと思います。

私達のカラオケ部会の「モットー」は「明るく、楽しく、元気よく」で、だれとでも仲良くしていく、楽しい部会にしていきたい。

一人で歌を唄うのは、苦手と言っている人でも、飲み物が入ったり、まわりが楽しい雰囲気になってくると、デュエットなら二人で唄えるからと歌おうとする人も多いと思う。カラオケは、まわりの人を明るく楽しくさせてくれるものであり、歌はいつでも生まれ、歌い継がれていきます。

カラオケ部会は、歌を通して、人と人との出会いを大切にし、思いやりの心を持ち続け、楽しみながら地域の皆様方と共に、歩んで行きたいと考えております。



東部町郷土史部会

グループ数　1
会員数　24名

一、部会の結成と経緯

（1）おこり　〈古文書研究会〉

おこりは昭和47年東部町公民館において、町民大学が開かれて、その中に古文書研究講座がおかれ講師に黒坂周平先生、尾崎行也先生が招かれ、講義を聞いたのにはじまる。

受講者の希望により町の肝入りで古文書研究会が発足したのである。

以後昭和48年11月14日東部町文化協会なるものが生まれたが、本部会は加盟することなく、平成10年度16年ぶりに郷土史研究会として新たに出発したのである。以来平成14年度で4年目を迎えるに至っている。

二、経過と主な事業

（1）平成10年度

ア　総会　講演会（2月23日）
「瓦礫からみた奈良時代の信濃国分寺」
信濃国分寺史跡公園管理事務長
倉沢正章先生

イ　上越の旅　65名　講師　石川好一先生



高田城跡にて

（2）平成11年度　（2月24日）

ア　総会　講演会　　講師　小林　富先生
演題　「歴史よもやま話」

イ　東部町内史跡めぐり　　石川好一先生

ウ　伊那への旅　　61名　石川好一先生

（3）平成12年度　（2月23日）

ア　「仏像よもやま話」　　石川好一先生

イ　「真田郷を訪ねて」　　石川好一先生

ウ　「川西地方文化財を訪ねて」　65名
石川好一先生

（4）平成13年度　（2月24日）　総会

講演会　「真田氏の光と影」　久保浩美先生
関ヶ原合戦と上田城

ア　祢津東町大日堂御開帳（4月28日）
・大般若経六百巻輪読会　厳修
・二十五菩薩来迎会見学（小諸市平原十念寺）

イ　「信州の鎌倉」塩田平とその周辺
講師　黒坂周平先生、塩入秀敏先生

（5）平成14年度（3月4日）

総会　講演会
「海野の大商人長門殿の雑談（ぞうだん）と海野宿」
桜井松夫先生

ア　塩田、別所、野倉、中塩田地区研修
講師　宮本達郎先生（5月22日）

イ　「依田窪、長門町の文化財を訪ねて」
大竹幸恵先生（長門町）

三、主な年間事業、特色ある活動

・会員が次の三つのことを原点として深める。
(1)土地に即してものを見、考えること。
(2)その時、その時点、その場所で問題とする。
(3)その時、その時に生活していた人の姿を求めること。
これは、地方史研究の**いろは**である。このことをお互いに忘れないで求めて参りたい。
・総会、講演会は会員の交流の場であり、会員の研究発表を取り入れるようにする。
・視察研修は会員に固定することなく、歴史に関心のある方なら大歓迎し、組織の強化、拡大をはかるようにする。
・高齢者にとどまらず、若い人の入会をよびかける。

四、今後の課題

上記に述べてあることが課題の中心であるが、会員ひとりひとりが求めているものを自分の力で明らかにすることが望ましい。

また、会合などを大事にして欠けることのないよう努力されたいものである。

